

第1408回(11月15日)

1988年のアメリカの干ばつについて

中川光弘

1988年のアメリカは、1934年以来の深刻な干ばつに見舞われ、小麦、トウモロコシ、ソルガム、大豆は対前年比で14%、34%、26%、21%の減産を記録した。この88年の干ばつは、グレート・プレーン、中西部上空への大型高気圧の居座りによる、ジェット気流の分断化によって引き起こされたものである。このため、中西部、北部平原の4~8月間の降水量は1934年以来の最低を記録し、北部平原での春小麦生産、コーンベルトとその周辺でのトウモロコシ、大豆生産に甚大な被害をもたらした。

ただし、干ばつの穀作経営への影響は、その地区の干ばつの程度に応じて大きく異なっており、また、在庫水準が低かった大豆では、干ばつによる減産が市場価格を大きく引き上げたので、干ばつによる純収益の減少はトウモロコシのように大きくはなかった。干ばつによる市況の好転を反映して、1989/90年度の作付面積は拡大が予想されているが、輸出需要が旺盛な小麦、トウモロコシでは、干ばつの影響で急減した期末在庫の回復はそれほど見込めない。

1988年の干ばつに関しては、周期説、温室効果説、偶発説の立場から、それぞれ意見が出されているが、アイオワ大学の農業気象学者トンプソン教授は、周期説の立場から、アメリカの穀物生産が変動期に入ったことを指摘している。穀物供給の圧倒的部分をアメリカからの輸入に依存する我が国としては、今後のアメリカの穀物供給の動向を注意深く見守っていく必要がある。

第1409回(12月6日)

最近のアメリカの米事情について

中川光弘

1988年のアメリカの米生産は、世界市況が好転したのをうけて減反率が35%から25%に引き下げられたこともあって、対前年比19%増の691万t(粳ベース)であった。減反率の低下に伴って、作付面積は23%増加したが、単収はミシシッピー・デルタでの春先の低温とイモチ病の発生等のため3%低下した。市場価格は、1987年の東南アジア、南アジアの干ばつの影響で、88年2月の輸出価格が87年8月の2倍強の550ドル/tまで高騰したが、その後は国際需給の緩和を反映して落ち着きを取り戻しつつある。

アメリカの米需給の今後の展望としては、FAPRI(食料農業政策研究所)の予測によると、輸出需要がゆっくりと増加するのに伴って、生産も増加し、市場価格が91年ごろにローン・レート水準を上回ることが見込まれている。しかし、目標価格は1990年農業法の下でも引き続き引き下げられるので、減反計画参加率の低下と米作経営のエーカー当たり純収益の低下が懸念されている。

米の輸入自由化問題に関しては、第1回目のRMAの提訴以来、米が日本市場の閉鎖性を象徴する産品となってしまったこと、依然世界米市場の過剰基調が続いていること、米産業への財政支出の削減が強く求められていること等を考慮すると、アメリカに対して中長期にわたって我が国の米完全自給論を主張し続けることは難しいように思われる。市場開放までの時間を出来るだけ稼ぎ、生産再編による内外価格差の縮小に努めるとともに、GATT、GECD等の場で基礎的食料の国内自給の原則を確認させ、たとえ輸入を認める場合にも、工業用米の輸入のみに限定して、アメリカにおける我が国米市場を狙った食用米の技術開発を抑制することが重要であろう。